

介をすることはせず、各部ごとに大まかにまとめたい。本書をめぐるいくつかの論点を提示してみたい。そのため、本書収録の各篇すべてについて言及できないことをあらかじめお断りしておく。

第Ⅰ部「地域歴史資料学の構築に向けて」では、本書が目指す「地域歴史資料学」を組み立てるための考え方の基礎が示されている。高度成長以降の地域コミュニティの弱体化や、阪神・淡路大震災後の大災害の続発など、歴史資料の保存と継承をめぐる困難が生じていると現状を捉えつつ、それでも災害時の被災した歴史資料（被災資料）と、災害そのものを記録する資料（災害資料）の保存が社会的に広がっていることがここでは指摘されている。そのうえで、これまでの歴史研究の地域との向き合い方を問い直し、地域との関わり合いのなかで歴史文化を保全・継承するための「地域歴史資料学」の構築が提唱される。

それでは、その際の実践現場での具体的な課題とは何か。それが第Ⅱ部「地域歴史資料という見方の発見と展開」、第Ⅲ部「東日本大震災の現場から」のなかで、阪神・淡路以後の被災資料保全活動の現場から提起されている。たとえば資料所在情報の共有をはじめとした活動にあたっての課題だけでなく、過疎化にともなう資料保全の困難さ、それゆえの災害「前」からの予防的な活動の大切さについて指摘されている。また、現在進行中である東日本大震災の被災資料保全活動については、被災地での取り組みだけでなく、山形や関西といった周辺地域・遠隔地域からの協力のあり方が提示されている点は重要であろう。

第Ⅳ部「災害時の地域歴史資料保全の方法をめぐって」では、個々の現場から生み出された知見でありながらも、資料保全をめぐる全国的なネットワーク形成や、担い手としてのボランティア、あるいは技術的・法制度的な問題が論じられている。

いくつか本書から導き出される論点を提示

歴史文化を大災害から守る 地域歴史資料学の構築

奥村弘／編

東京大学出版会

2014／1 422p 22cm 5,800円（税別）

ISBN：978-4-13-020152-0

本書は、編者を代表とする科学研究費「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果をまとめたものであり、序文やデータ編を含め計30篇が収録されている。各論文は4つの部に分けられているが、紙幅の関係から、論文個別の内容紹介

してみたい。編者は本書を通じて、「地域歴史資料学」の構築を目指すとしているが、そこで言われる「学」とは何か。第Ⅰ部においては、主として歴史研究者としての立場から被災資料保全活動を「学」として立ち上げ、位置付けることを試みている。ただし、第Ⅱ部以降の具体的な実践を読めば、様々な立場から、それぞれの現場に即して、多様な資料保全の取り組みが現在進行で行われていることをうかがい知ることができる。その意味で、これらの活動をどのように位置付けるかということは、歴史学だけでない多様な視角から問い直すことが必要であろう。

たとえば、これらの活動を災害時の資料保全活動のこれまでのあゆみのなかで位置付けた場合はどうだろうか。

編者が指摘する通り、阪神・淡路大震災まで、大災害時に歴史文化関係者が集団的にこのような活動を行ったことがなく、その方法が体系化されていなかったことは事実だろう。だからこそ、阪神・淡路とその後が続発する大災害が、資料保存のあり方に変化を迫ったのは間違いない。とは言え、保存修復の面から考えてみた場合、本書所収の内田俊秀論文(Ⅳ部6章)のなかで取り上げられた1966年のフィレンツェ水害を契機とした資料保存の考え方の変化は重要であろう。少量の貴重資料を重点的に本格修復するのは異なる、何十万冊・何百万冊という大量の被災資料に向き合うなかで日常的な資料保存管理へとつながる考え方が生まれていった。日本においても、阪神・淡路以前に、個別の被災事例は数多い。集団的な活動ではなくとも、そうした文脈から考えた場合、阪神・淡路以降の被災資料保全の画期とは何だったのか。この辺りに関する本書の理解を知りたいところであった。

この点を考える際に手がかりとなるのが、本書のなかで示された、資料保全の担い手としての「市民」であり「ボランティア」の姿ではないだろうか。東日本大震災においては、それまでに蓄積されてきた被災資料のク

リーニングや乾燥のための方法が数多く発信された。そしてそれらのいくつかは、保存修復の専門家ではない人々が実施することを前提として発信されたものもあった。本書各篇にあらわれる資料保全の主體的な担い手としての市民の姿は、こうした技術面での積み重ねにも支えられたものとして理解することもできよう。

天野真志論文(Ⅳ部5章)のなかでは、日常的には歴史資料と関わりがなかった市民が、被災資料のクリーニング作業のなかで主體的な役割を担い、それを機に歴史資料への関心を生み出していった事例が紹介された。他の災害ボランティアと比べ、被災資料保全のボランティアがまだまだ一般的な認知を得られていない現在、こうした担い手の裾野を広げることじたい、本書のタイトルに示された「歴史文化を大災害から守る」ことにつながるはずである。その意味で河野未央論文(Ⅳ部2章)は、2004年の水害対応を機に歴史資料ネットワークが継続している水損資料応急処置ワークショップを、具体的な実施手順を含め紹介した。これは、担い手の裾野を広げるための方法それじたいを広げるものとして、本書のテーマに照らしても重要な位置を占めるように考える。

現実に、小林貴宏論文(Ⅲ部2章)で述べられた通り、山形の現場では「生活に根ざして、さらにそこから一歩踏み出した能動的な市民・学生・ボランティアの姿」が現れてきている。この姿こそ、阪神・淡路以後の資料保全の画期性であろう。平時・災害時に関わらず、社会に根ざした担い手の広がりをこれからどのように支えていくのかが、問われているのではない。歴史研究者やアーキビスト、あるいは保存修復の専門家だけではなく、地域の歴史資料を社会全体で守り始めたこと。阪神・淡路以前からの文脈で捉えることは、その意味を見出すためにも必要なことと考える。

なお、本書は決して、同様の活動に取り組むにあたってのモデル事例の集大成ではな

い。むしろ評者が各篇を読んで抱いた印象は、失敗と試行錯誤の集まりである。各現場と、活動の担い手ごとに、向き合う課題は大きく異なる。それは災害の種類や規模に応じたものかもしれないし、そうではなく過疎や小規模自治体など時代や地域固有の故なのかもしれない。各篇から見出されるのは、普遍的な資料保全活動像ではなく、それぞれの現場に向き合いながら、試行錯誤しつつも資料保全に取り組む人々の姿である。きっと大切なことは、本書をモデルとするのではなく、本書を機に、自らの現場（それは地域であるかもしれないし、資料所蔵機関や大学、企業であるかもしれない）を見つめ直し、今何をしていて、これから何ができるかを考えることであろう。その意味で、本書第Ⅴ部・吉川圭太「データ編」が、阪神・淡路以後の関係年表、各地の史料ネット一覧、関連論考一覧をまとめており、本書をきっかけとしたさらなる一歩のための手がかりとなる。

各篇を読み終えた後、資料保全への新たな一歩を踏み出すことのできる一冊である。

東京文化財研究所 吉原大志